



好文堂

楠三代壯士

一之巻 目録

付り魚塚と結んだかお美豆の  
綿然短い分判

明治三十六年  
九月十一日  
講求



あつち標の科小から取んた高名

知りた不足の内院の短し

迷情を云松芳の怒

知る道名の喧嘩ね

酒接端れまの目長い

心通の分角の尻くね系

お掃の産身にあつ

門一連  
號 067  
巻

第一 初屋の娘 伊勢落子で落女神

有卦振るはる置下戸此の個子其合細より  
あり其の初り氣一河はるの勢をらる々金まら  
碎碎の煎炊名といふ所の嗜の色の一字

第三 西なる甥小瓶と付る親乃片破

俄身方の下子の木のかりわづまい物段  
内院知どのまぬと押付こととが推を  
世るれは伊勢小のゆ美んとらまを推ひ

序

菊池

をのまじがとま一はは藝とまのんあ  
分際ふららら瓜人。身をあらはと悪人  
ゆか。人のお悪の秘ぐいとして。ゆりにも邪  
乃瓜おらあひるまられ。あは胆智乃もの  
徳あとして。大祿とむさがるんがめ。人よあれ  
まねる者こそふ人もうこたない。其男は  
口して悪ら瓜あま。じく味を菊池酒































